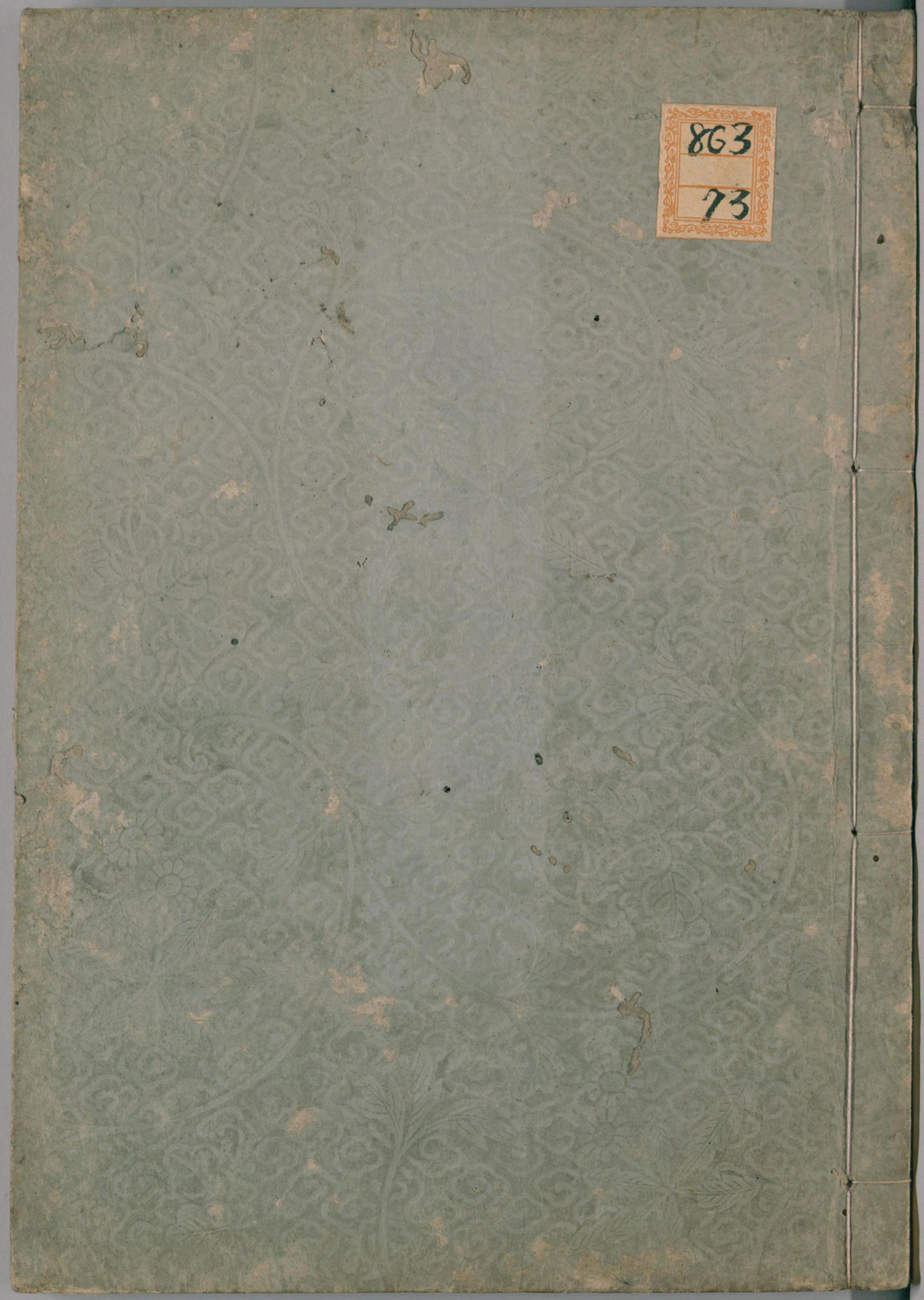
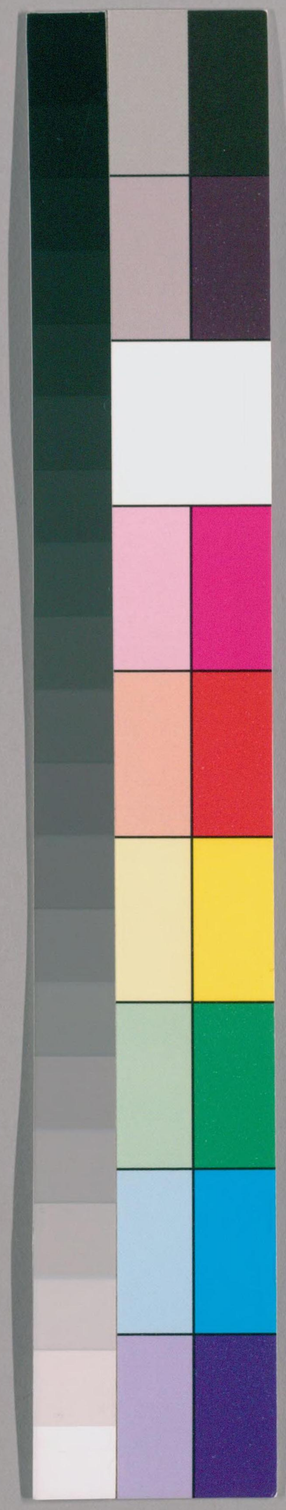

863
73



国立国会図書館　　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73

ガラス使用

863-73

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73　　ガラス使用

俄洲あまたの数あるの中に遠をの
友人はあるとも凡を交へ入ひ何れ
君となれるを道の燈籠と称し事
廿年四向の中よりと云ふの西ならば
もれまゝなり康兒のわかりより

栗木玉屑記懇浸書

寛政五年廿十月

正風宗師百四忌

追福之俳諧

此ゝ也行さ紀あふく浦社表　玉屑

四海に勅くなる此ゝと遊　柴山

紫鞍に朝山さゝ手打ら其　布舟

栄道の月さやかしまゝり　五陵

梅の間に杉立を持ち一あり　青岐

秋の日和のかゝ原雲つゝ　可群

何ら謝に芳愛苛の月細く　芦筌
鳴る此龜子紫く牛の子　金毛
ウ
行る教伯父の和尚を見忘れて　我白
其狭へ出る夫婦の入口　亀文
注連引し楠の枯木の打撓　帆丘
おしろす来鳴る雪の菊　李村
自人にあはぬ恨の袖重く　飄瓦
いつかきえぬる関の炷捨　南嶺

文車に手巻の書をかきわけ　皓月
斎院のむかし吊婦　如是
高嶽より月さ欲あらり涼しも　青城
田子の田うへの名のおもひ後　羅十
蔵穂子ごしの夏笠打変く　里奥
いとき鶴長亀を叩く生鯨　和流
雨雲子吹きふ兼の色妬かく　無曇
雄子の宮きよさいく山鳥　言花

一丹山の坐たて浴る彼岸さ多　梅山
数艘の舟をの浮き川風　青石
さ手よりも高が鉄の高お塲　左水
三園の遊女なら駕舁　大麓
簒の目す明日の思ひを占く　樵山
甑の飯の焦さきなり　保玉
勝をとる軍のあとの朝の月　素有
桔梗の京の富士と姿　青洲

きぬさ嫗駒のあしなさ高く　狐頂
いくむ雲歯を押さ也り　物橋
勗當す親の旅を嫗し拝さ　雀空
法華になりさもや十日立　二春
和の山に小庭の牡丹生なら　梧庵
光を来る　鳴　蓑のうしひ来　執筆 波洲

一座探駅

[illegible]風巾　松帆　羅十
[illegible]眺るなるに於ては春の風　無曇
[illegible]日拂なるべし　[illegible]詠　五陵
[illegible]　大麓
[illegible]　青城
山[illegible]　帆丘

住れ[illegible]　鮭　亀文
[illegible]胡蝶[illegible]　南嶺
[illegible]　和流
[illegible]　樵山
[illegible]　素有
[illegible]　皓月
[illegible]松の[illegible]　保玉
[illegible]　青洲

撞鐘や鐘の音なし風の面　梅山
みなり吹風のうつ里や春の海　白鳥
松目詩鐘や出でしむまし騒く里の居　鳥秋
茶の学す伝い初なり二日目　春調
いとゆふの入日を清なく沢煙　陌柳
春の夢の隔岸堂の夢図遠哉　匏湖
吹雪の色なく行き雲の小豆粥　里奥
清雪や絵きぬす稲吉の薄自然　芦筌

昇る日を斜に引や百姓屋　波洲
小川春の梅のうす堂川鴨水　小山田 青岐
留士しりん雲鷹の巣山の朝朗　左水
水自ふ種井の一やおほ後自　可群
かゝ手伝ふに玉藻乾くや春の夜　如是
雪を書を落す土くるく数くの菊　大谷 紫山
あの祢さ須雪をさしねや春の居　佐野 楓頂
無さてのりさしも春を問ひ来り　萑空

梅甫
物橋
柳沢 言花
二春
我白
金毛
飄瓦
捂庵

郡家 青石
養浦 李村
須本 八亀
玉屑

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』 請求記号 863-73
ガラス使用

後莚俳諧

春の鴨まれ子小吹やまれ春　布舟
同覚すこし先の事ふ窓さ花　五陵
清雪ゝ御幸の衣紋あふれ　無曇
赤倒の酒をこれ祝ふなり　波洲
三日月の光のかや雪にむかふ　王屑
あらふの色をこし川の深孫　梧庵

きゝ屋落ちあれ出の洲しそ　陵
日ゝ祝のあらなる和尊調数　舟
おほしゝ回降のほ夕ゝ祝　洲
盗みそもしゐるやれ・侍妾　曇
ゝれ四日香舞の回ゝこゝふも　庵
吹来ゐかき線なるの妻葉柳　屑
一面子拵れ自ふ小才丈　舟
武蔵の坊のむかしやや　陵

墨占す物住方を吉美のほとゝ　曇
松日詠ようむお月れ上京　屑
茶もちや咲まもちの紀四才れ色　淑
拾ひて帰る茶れ片角　庵
角原の物場の勝手見あきて　陵
天狗れ住し石室を問婦　舟
黒雲ゝ風吹れ出風一気色　洲
吹草高川黒れ果し黄昏　曇

蒼茫れ拾ひなき悲平かへ　庵
なく子銭ちの山陰　屑
半ちに刺て落し黒る桐れ美　舟
角の時雪を通ふ　春　淑
淀塘き稀く冬暫れ四三丁　曇
はなきも清く世れ中れ秋　庵
初鮭の小園豊より月待て　屑
石敷をならす露れ馬場先　陵

名干れ袖の下なほ志のふまり　淑
調物の牡丹胡籙にさし　舟
井ゝおほ曉の仲ゝ鳴ゝたり　庵
藤姫のしと小家からなり　曇
咲ゝ春千年れ乳の薄墨　眉
居並婦捺を傳ふいと遊　箋

荒礫や納涼な猶黒る小松嵐　郡家　荊玉
裏れ松や月毛れ駒れ兵衛佐　舍苗
夕月もさ次の手梅のまほひ弥　女　春姿
御簾をもれ菊れ匂ひや夕冥暮　石蘭
夕の雨手雪月あまる雲の中の雷　移竹
夕ゝみ月岩橋をのほり分　君山
三日月に梅ゆりかゝほ柳の水　須本　瑣尾
り水も志ふ情ある春遠外　松蟻

霞れ間や公子志ほる神さくら　忻然
深山詩や敵詩も解風連さくら　角川　花関
荻子荻や地車　習くタすゝ笑　潮江
明ゝ雲や雲雀　鳴雲川麦れ中　鮎谷　斧孫
山吹れ下行　秀乃　雲のり歩　大捜並　鏡梅女
跡さへきやむしれ音れ小夜鳴　廣石　画舟
東子雲川や稲のむら穂ナク風　久野々　春里
絲子れ蔵小松をとしるタアの角　浦　梧秋

追福之俳諧　木綿浦社中

巴紋

百しきれ其名やまほふ茶れ落
かきもれほ詩ナ自ふタ月　脱負
鶏きぬれ袖のいしゆふ川ちへ事　玉屑
胴江をまゝ飛なれ詩舟　葭笛
雨雲ナ鶯れ拝さきやかゝ風ち無　流志
麦蔚志ほれ松ん拝雲りなり　如竹

小春堂川寺の棟上あるゝかけ　孤雲
うれきゝ里堂を共　脊戸の橋　如拂
神代より馴居る狸まの告ゝ　梧庵
土用なるのもに屬の文彼　筆

下畧

まゝ花を地下志く色や春の海　脱負
なき花春小雨下深ぬ叢の梅　如拂

陶器を耕寄春の山田の菊　如竹
桃さくら膝下桜の白ひの孔　流志
きてこゝ紀や梅香下勅く閑の色　葭笛
かゝ春泊ふや巣立雀の梅稲里　孤雲
涼しけや目に泥吹　池の奥　巴紋
吹絶ゝ梅風をなほ白ひの水　梧庵
なふことを春の松もひ花月の雲　王屑

伊賀社中

さらし芭蕉葉の書忘れあらず其いまし一を
なす川のしく伊賀の国上師なる菩提寺豊染院に詣
けるに古の塚升木の此ハ宋寂に石を
苔むし　籬をそれ其の色をあらそひ厨の猪に法と
ましあり猪もさいらすとて南り丈六千陽光の美の
此の庵も猪ちのく猿ハ小簑を目しけなる山中にハ何
のしか小簑塚を飾きよ風くさくらハ其世のうを
猪し師松亭ハ其の此まくて梅花に目出度家栄を
この絶千名豊数五庵も孫升庵ハ絶えて東叢西
叢庵ハちのさ諸豊みくし其古園も庵しく頭ハ
今に猿蛙の此なるのれをくむ庵中猪伴くく再庵を
むすひんのおもひを起其簑虫庵再形庵ハ幽千

猪ハまくぬるくひ杖をとく見ぬ伴の幻すこのふ
二見形の文墨ハ塚何のし未奥水鶏笛のおのしこ
川口氏嵯峨日記の内見やのなる程井上氏鼾の圓ハ内神
房何のし遺物なるべし正蹟ののしおきハ記録にものし
吾嵯峨家の寶藏に秘見遊ぶとのやうに家に
猪まる姉ことあるとも吾国のかむすむにしてしたふを
このひてハ玉の様より観のことに漢り世の林子
猪りしかゝあハまなるありすかやのなるのりて幻
に遊んし心地しく後衣を志ほれ

玉屑

誘ハまくて東の川水を塚て泣

松尾氏　桃七

東向の袖にし猪数美の魚

青李

厚金の遊ぶ雲話や雲あむら世

鈞永帰る沖の山の風　如鏡
から臼より五木の茶を搗まる花　呉川
月雲小窓より出る朝霜　槐主
小男蔵の尾上より春を引揚て　芦中
家をきゝ神原稔の話　烏夕
横笛の調へも風より乱き清く　杜音
伽羅の匂ひよる人やまりらん　東下
辻占より寒さ交り行ほとゝかん　菊乙

神垣少の原杉の　むら雲の　素秋
下郎らの謹重け　すかしこ満り　石文
吾妻訛の手ふ　紫松の茅　楚水
蒼雪の月の綱眉の原おや　未塵
ましら木伝ふ峰の名枯　筆

下畧

伊賀上野

清く侍りぬ其のまゝハあの辰山さくら　槐主
やうて来世蛛なりけれ詩を帰る居　烏夕
閑雲に癖の付りけり春の夜　呉川
百年の柱なれ川、春の秋ぬ　杜音
泡となるまてあふれ田井の水哉　梅二
雲とけ四春山く侍き日の稀り　芦中
蚊刺しかとしかましや猿鳴りし　青李
たしまれしちる世の礼や初桜　未塵

文音

京

よろ侍原あさこの日の光や九月雲　蝶夢
降しらすかさなる雨の若の雲　月居
雲のさとれむこのしハ志くし加古の松　不木
狐火す国のなれ茶志しみりり　紫暁
おさくらや雅織のけ雲の松子　車蓋
朧ゝ柳の雲と茶すりり　挑睡

春陽の春の下なり淀ハ幡　百池
着りしや次第ニ蒼のかゝりの雲　白黛
三川なまゝ三川ニ別まで花胡蝶　春坡
此ハ後やまちりかゝり咲こゝ里　土卵
人なしと能ハまゝ縫ふ紫ふ　其成
暮の目志ましかく風ゝ嵐の南　古塘
夕着の目をし隠ゝ枝の形　青阿
半川ゝ春の雅ニ晴ゝ時ゝ雨ゝ　尼　俚尤

みゝの回ほとゝくし先ハ咲ゝ鳥　指月
をし今の岸ニよせ来ゝ本の花ゝ乳　貫子
いなくゝ下や闇ニ出ゝ夢　嘯馬　米駒
染面のきぬ計ゝるし柏の義　沙長
風ニ蔵ぬ志十分のしきの南　一峰
目新ニ乗ゝ志ゝ分　雪の隙　理芳
白牡丹酒　妬くあとゝ詠めゝ　梅斜
松の後志ゝ塀ゝ崩まゝ志薄　美泡

なきあとし比良吹きけるなり　芦淮
月関よ汐干の海のかきりの南　嵐月
山雨すこし夢当来の鳴の巣立の孔　定雅
ほとゝぎす鳴や五月の朧月　甫尺
水あくる雲の帰き見えて暮の月　蘭更

それに花雲の引来や和奇の波　宇治 梁円
春をのけて梳業川宮や春の雪　田原 毛條

茫の山なしおもひ住俗世　江戸 完来
打水すゞきさきなくなしきかり　成美
うら吹や落分行丸合羽　宗讃
朝の春の柳に咲き吹き分り　菊明
暁や春なき山の杉の家　寸来
散きしき二月の月を見付ける　吹石
人の気の春吹風や秋の山　瓜坊
うらの春や千鰯の光る谷の家　大坂 二柳

風強くふる夜は星のひかりかな　在坂 如流

白蝶や其身を得たる夢の夢　白岐

花梅見てきえて彼岸の入日かな　旧国

墻のいろにも秋さえ生るや槿　尺艾

縫ふ頃や静な山の入日の雑　紀伊 香風

几山も夷ふ来ぬる蹴躍跡　阿波 青搞

こりおちめれ世を蔑むや生大根　丹峰山 其白

石山のあはしさハりて蛍　河守 無諍

浅き蛙をらくにしの湯あかり　丹波 秀峰

義節の水をしらけて水かり　翠實

疫病うつしてより目の前か水　大和 可翠

雨のふる、宵の月の来や竹婦人　武青梅 凉宇

雪水や車のあと残れ八分れ　伊勢 弘臣

さのしや海苔売えの声聞き　蘿道

なし海や花をみるしろに渡りか　鵬明

峰高し月の影を屋の夢　舎乙

鴨をかりしものは騒くの物の音、鶴臺
花は雲も礼の滝程に揺かり　遠濱松　白輅
折らおれ嘴ぞ此ハ春の南　岩挾　沂山
茶は森茶都の出し西の果、陶阿
鐘冒く景ゆ此うへやほとゝおれ　信州　雲帯
義秀は絵に春は三月の分、麦二
所詠よく郎駒把当る春遠に、自得
舟の敷はふかなくて見る自物外、如毛

はりよりて見を後に苔は花の末　丹宮津　百尾
夕ゝ秋の秋と来ハり須广の海、一声
自は居一ね春みて乱遠ハり、風光
夜雪籠て風清のる田中の南、寒口
清雪や馬は尾志ほる音明り、馬耕
あは山の義は森ゐるも山のゝ春　上丹　雨什
松山の七崎ゆ物はさゝらの絵　加賀金沢　蘭尾
きゝ里嫗さる黒柴は茅は照柴外、春蘿

さ[illegible]のあるかんこ[illegible]　尾州　士朗
[illegible]れハ水[illegible]山、騏六
[illegible]の月[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]みへ、五周
[illegible]あハ[illegible]秋の[illegible]、羅城
[illegible]水[illegible]、臥央
[illegible]　相摸　朝叟
[illegible]　甲州　可都里
欄干[illegible]、石芽

[illegible]山[illegible]れの[illegible]ハ[illegible]　サツマ　完而
三井寺[illegible]　二河　素竹
[illegible]　備岡山　子坤
[illegible]　備三原　士芝
[illegible]　田房　古声
[illegible]　倉舗　素郎
[illegible]、馭風
風巾[illegible]　肥後　箕溪

湖より稱りてく涼しし目の暈、潭月
雲の孫よりかきなほ八重の雲の外
ちからなりやり屠まで孫くまで尺 山庶 尺屈
三月の雲我把ひ取ひ詠ひ 筑前 蝶酔
梅白くそのまもよらぬ見ひけり 豊前 木腸
豆の蚊の時見えけり 赤間関 里山
り秋や石に方をしきりしまで 江州 薫里
春秋や稀に人ありむ 五来
ふへ 道 騏道

ふぬ雲の侵の人に馴染けり、亜渓
二ね鳥おりの日岡や朝揚 志く女
飛星のかけ子荷けり 春の善、亀淵
うてのうや永子なるむる 嶋の雲、柏由
まあらし加茂の氏人 吹まで来る、得徃
やとり木の雲子を見ん 拈柳、石蘭
九度時雨ふく市の 義仲寺 重厚

寛政五丑五月廿七日於加古川光念寺興行

追福之俳諧

蛸壺やはかなき夢を夢の月　玉屑
うしぬ世をしきなるれ　曙
から錦ふ川らふ幕やまゐるらん　蝸国
采女の顔の雨に出るかな　貞武
山菓をれ咲れ紙ある春れ風　五栗
房垂礒菜に紫ら鐘くなり　湖月

清ちらす星を志るむ捻ぶ蔵も　布舟
冷し餘らふ曲戻れさゝ茅　松溪
落てなく二十日嵐の一の堂くて　可敬
悲し寺契や刺拾ふ蔵ら世　如鏡
足掛の神の志るしも祥ふりし　寫竹
按ハ冬至れ禹に自ふこ絡　帰木
鶴ふ舟を下ち日和のかお暑り　其成
斤側甲午牛れ突あふ　五刃

東圃
桃水
梧庵
仙子
藤泊
脱貞
五齢
巴紋

化麦
梅舎
洗洲
巣雨
起蝶
霞江
花瓦
葭笛

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73
ガラス使用

仮弘の宮司の胙さ届き給ひて　巳上
をくる家　小の原　若升　升　月　流志
草の葉の敷きて　孫の葉　梅明
鼾のおとの雲の表　長　嗣　南嶺
世の中のたゞかも　あふも雲　夜し　田旭
冬枯しなる　雪の夕　暮　彩州
土鳩の餌まゆ　ゆ給ひ　啼やん　石契
貢をたゞ婦人　法ふなり　石香

きし　家原なるの紫　永沙まゝて　古瓢
重まもかきとる　志の　出るの原　岩苔
干温飩の篠　探のそる　影のつま　章台
姫　ミやこの品　川　里　り　五風
老年のやまひをいとゝ　いとゝ　竹塢
菊の　を話さへ　をこゝ　わかし　五艸
二位　の　遠の　文る　月の　比　花樸
翦の　墨　宇　み　出　のりなり　執筆　宇竹

寛政五歳七月廿四日於神宮寺興行

追福之俳諧

荒井社中

あのしらし日暮つきなくも秋の風　東圃
蘇をまはれやしの志ら萩　玉屑
菊の後やほの五明れから夜　青角
鳥より鶴の硝子のさけ　湛露
舟もるす入江の沙の満うけを　如竹
屋ありあしを伴ふあらむら　鳫南
桜南くらぬ月ことはまくこそ　淇筍
柳すなら嫗末瓜のもりしも　五栗
稀日素ゑる駒すくるをうい　捂庵
庄司の姫よひのくれなり　冠字
人なしし思ふ恨を志れひ事　冬拂
俳積ちれまほふ夕々雑　里山
西窓へ囲炉裏れなふり吹囲　楚雲
瓶燭業もう拙しのうさ

百ちの美二人の想ひつゝへいて　挑里
おこさしめ帝国御柿の浴　帰木
荷を刈る許されし月の峰凄く　布舟
鎧を蒙りきて捨し徒士武者　筆
立なくのしら楠の鬢を吞ぬし　圃
神を伺ひ稱す。暝　屑
松松や遠山さくらむ　曇　角
巣の伊とき夢の啼神ゆるさ　露

氷にさゝる蚊屋の軒立朝の面　荒井　東圃
来れ此ぬ袴色重き飄の坂　湛露
見しとの此とし川に立てわけふの月　青角
みな此月軒端の柳折にけり　抹田　野上
大雪や雪も新の筑波山　暮蛤
名月やいくひくぬむ橋の蒙　尼　香蝶
木瓜の美あまり赤さうすく後ぞうり　李雨

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73　ガラス使用

鴨遥々舟通しゆかりの海　雨人
すゝしさや月さ沢沙まなれ彩　那波　嵐外
涼しさや橋をも飛まゝ艸の原　新甲　五艸
折水れもしきや彩の詩志のふ　清水　呼鶏
小夜時雨彩れ柳れ枯浪れと　釼坂　花樵
才を始るふ聖的れ馬也初時雨　南嶺
松をもゝ升す入まて梅の月　米五
五月雨れ色もふ庭のさつき外　志方　者来

追福之俳諧

奥崎社中

才ましまして世もおるし時雨の乳　洗洲
像へ手向数菊ゆき仙　呑夢
鶴鬱暝春ゆ来鳴ら雲　玉屑
引後ゆ来公家のこなし子　彩洲
あましゝ聖分まさつむ月の雲　素功
岡田れ水を落ち川をと　蚊足

徒手秋の蓑入長居しす　觀奠
使の手の飛走仕業より　澄巴

下畧

秀の市の讀手にしら朝の雪　魚崎　洗湖
山寺の尾手引事の小雪哉　觀奠
さこのつまに無きみとりの柳の角　彩洲
清雪の箱手積るや　傀儡坊　呑夢

蕭つむ手もとに事の自ひ水　澄巴
ふ桃安お日をいとく吹秋の風　素功
うしうりや嵐も強く冬の月　上田　田旭
蕭うり雪を爪手いまひかり　梅明
雪婦けて走るに嵯峨のきぬ水　广雪
爲さハく冬田の果や比良の雪　雪柱
百とせの むうし志のハし蕭学　馬撞
雪晴て霧まり谷の風情水　明樂寺　竹里

雨ほれ色をも見えて孫 俺 月　冨家 嵩峰

うをかほるうへ敷ふれ野牛ぶ　繁昌 螢渓

敷ほしく狐啼ひり各れ月　孤松

しときりれ新まり川ひなの鳴れ　一馬

撥来ず義とも見ゆ法土用干　三木 吞香

月をみるされも友のや峰の雲　如鏡

朝はより白ひ神ひり各ぶ梅　大野 寫竹

我のうと今無啼なりきりし麦　丹波 あかひ

追福之俳諧

明石社中

ひふあふく祝やあのしれ満の月　五齢

通ふかも見ず秋子ぶ啼　玉屑

才ませ美穂馴敷も蒙うけて　蝸国

亜し篭れ長ぶいのう毛　湖月

千通れ間風きし麦山風　化麦

れをたゝ婦人ほとふなり　梅舎

起蝶
亀洲
露石
錦波
其雪
巣雨

明石
蝸国
起蝶
梅舎
化麦
亀洲
露石
錦波
湖月

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73
ガラス使用

七草の目籠にあまる匂ひ分　其雪
日和ともなりて小田に啼雲雀　巣雨
いとゞ接ふに紫き留るや帰る雁　五齢
小松子多やしきて火に雲を松葉　高砂　貞武
三原ことに夕目さしぬ池の琴　李冠
松原にそこふかつて文礼ぶる義　菁莪
角原の老夫対なるに枯野分　右契
稼業く坂東武士也納豆汁　布舟

雲ちのくさあるの原雲ちの子ちの分　加古川　五栗
なかしとなく春に移るや拂さらら　帰木
涼しさや此川上に郁あり　仙子
朝のきりにまた志原坂の匂ひ哉　五双
しまら水を捎に掛る杉の葉　巴上
学ぶ藪似合し茅醫者かまへ　可敬
むこうし雲の然に持みてし杜若　桃水
塚多の婦ちや志見の世ちし此堂　竹塢

春もとゝ雨はきなくなりぬ小岡の居　曾根　松渓
酒も日をなくなる日をの叢の菊　宇竹
月まむく龍志く年歩き念佛　姫路　宗居
雨の日や生殺をもてる風巾　桃岐
笠に水あまれあり　杜若　五川
柳をみや川風にて乾足の甲　孤春
土手の柳筑波の雲手かくりけり　玄駒
少らしく菫吹かり春の風　耳香

ある人をまゝ孫おとし
五月雨をむかへて雨のほとゝぎす　二蛙
よき風の春を吹や　更衣　丹頂堂
苗代を分けて岡をの蛙の菊　蛙由
天の河鳴まとりけり　時鳥　花瓦
陽炎や僮　子をむかふ頃の海　千本　青塢
あらしそふ松を雨の沙干の水　白巣
春柳の子節手　桃の旭の朝　文阿

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73　ガラス使用

なく雲雀春の穂並ちらくあり　梅旭
白夜の日拂ひ傳ふ雲の事　亀鏡
雲ハ原脊戸の星きや胡麻の雲　北播　宇人
鴨立て あし濱の春に吹着ぬ　上松　蝶三
うち拂よく拈木菜咲事春の風　兵庫　古飄
楽し入揚かぬせ　ほとゝぎす　五風
あらけ稲穂新も匂ふる若ほ水　其的
松杉ハ落込む雲やほとゝぎす　巴耕

ちるもの夢のしおもふ夕ヶ方　泉有
將ひの夜ゆるを志ゑ春雲　岩苔
行春やむまりしるし夜ゆあり　章台
南ほ後しやほくしてむふ花の白　雲水　花縣
をとゝなし或媚ひ春れ古雛、紫元
時志らぬ時雨さくらもあれ　安藝　凡十
さ夜しの色に分りし　茴菊哉　肥後熊本　亀令
夜あしりの糸を傳ふきぬ分、飲露

美化なる真師の系の梅の塚の前に
席を設て祝翁の幸ふ志を吊婦

幾事の色に於て薫祝塚の之 玉屑

菊の堂の旭に むかふ人の事 有礒

舁居敷升壽に矢立の涼解て 馬肝

象股引のも美なる 白重

迫戸をのを取落し堂の月の雪 鶯里

萩に高ある中庭 其さ美 摸亀

東劇堂原蒼の初春の傳ゆる 蛙懇

於日降雨の晴て 豫立

八雲の孫を君の別 凌父

下畧

菊の香や千里の方に嵐あり 作五居 豫立

引前の於きゆるおもひや春雨の蒼 蛙懇

永かりや海追見て若菜摘 有礒

春の高もいとゝ河ゆり冬の月 女 千代

吹拂ふ時雨れあとれ小春ゆ　戸雀
あまり月に遠そふ霜の光のかゝる　播佐用　白亜
笘ふ手懐吹さ浪や春れ風　摸亀
神垣ゆ柳ふし堂川小面の菊　鶯里
水ゆれ寒ゆめ見えり冬れ月　麦父
楷れ火も美の雪のりか冬　馬肝
寒のほしにくゝつゝしき水ゆ　伊豆熱海　二鏡女
ち山木れ梅も美もよ紀自ねゆ　其十

遠忌時雨會俳諧

但馬手邊社中

芳や世に時雨くゝ峰の月　玉屑
堂ゆぬなこの結ゆ梅ふ香ゆ　屠竜
壮夫の劔をあらふ端居して　如流
一節のきれまりに吹入　君凱
春れ音れ幽ゆ伝ふ小夜嵐　梅渓
雨より本ゆ運ふ越凡　北川

常よりもいとゝ平れ土用猶居く　白民
ほつらふ猿安藤は温泉に入　もよ
ほりなくもう歩き恨をかくて終く　季冨
行る甲斐なき必要の神　焉岳

下畧

追福

藩戸や明て落葉れのしき水　屠竜
ほいれはふり時雨すかゝ風白ひ作　梅渓
くさに木子深れ時雨れ忘る作　君凱
をしく君れ松をやはふの手向草　北川
行れなしやうしら重なりけり時雨　白民
画姿や額突袖子降しら結　もよ
降そふる時雨や沼に豊むけ水　季冨
百とせや時雨もいとく自れ韻　如流
雨風れ神もなれよ大川　梅豊園　髭風

夏の月風に吹まて入にけり　日光　作夢
行くれの星やすれの雨井より、　嵐梳
水とりの鶯にかくりぬ鶯なき　奥州白石　乙二
目洗ひ立しまゝ石のたまつき　津輕　宜應
鶯なる日や西も光りも枯尾花　伊達　且茄
自落く霧師にあまりけり、　不必
月やすやあくせひ夏ゝ雨消ぬ、　冥々

陽光や雨なき濁まゝ原乃子ゝ花、　仙臺　東皐
素しきとや日落ゝ雨のとゝ落し、　文交
やゝ涼し自然日とりのたしの童、　魯人
日まむひて飛ばなる鶯の居、　路也
山吹や雨のし落の名なし滝、　柳叟
未だまゝ落さむしやまじきぬる、　想思
日のきの大鳥に合歓の星ゝ、　文貫
紫刈の家落を雨のけりなるのあ、　田竜

国立国会図書館　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73　ガラス使用

うらゝ祢子揚や川原の花菫、物外
ぬるみしや芹の花ふそよく水の色、蓼門
冬の雑や木の花ふ花もしるぬひ掾、石鯨
月子東ぬ我も一枝の頃方の夢、鉄船
稀子ゝ山田の田鰥小粒なる、南部一草
峰の花雨をかゝえ乱まり、平角
落花ふの夢てゝ手も足まり冬竜、遊斯
語るなくおの雨ゝ春の夜外、素郷

峰の雪松のみより見越外　玉州
須ノ方の浦や松吹ゝ口自然る、巴山
夏りや花野に落る天の川　出羽露橋
日ゝ花の花なるのよりあるあ撞ゝ、五明
冬の花の吹き切なり雲のしへ　越出雲崎古佛
山住やさくらにかゝる人をみん　参吉田木朶
長生の花むかしもやしや菊のきま　甲州西小原琴雪
楽さむ祇ん無くより長し春の雪、川田敦氷

百田忌正悼

但馬社中

重屏の松の姫るひや　冬の竜
いきまれ　笠ゆ　霧ふれ音　至峰
舎人らか月まも馴し　猿ゆくて　玉屑
刈て　猿をく　萩れもあら　野牛
啼鶉篠張　網子ことにしら　謂庸
猿くハ　ことれきれ　朝の雪　季仙

百両千津崎も狭　身積ゆ　馬北
青くらんたちらん　脊ゆの築山　五畔
山多れ　あらまさいしく　日れ　なるを
搖　坐れ　稈を　飯子　禁なり　春紅
風住　所ゆ　諸の　義の　心　牡丹　乙坂
昔ハ　涼し　夢　玉川の　夏　字樵
くりこの　ゆ　綫の　をくゆ　きもたまつ　巨山
恨む　アふ　こ　ア　早ゆ　れ　日れ　朝　明器

仲なるに清きなくて丹銭乗るなし　松芽
鶯のけ折以さ美れ奥　斗山
千蘭盆も出多く涼しき朝の月　長圃
佃の稲れよほしく色清く　芝岡
長草を提来る祇園のみぬ里　涼秀
御裏笠浦千馬れ御や召夏　奥讃
青山れ出煤燈千海えて　袴仙
経るれ高き千波る横雲　可然

ちりきめれ沈とけ神る春の風　兎雪
女れく経て朝のめしくふ　諸香
牛れるを安くも産てう雅久雅　蘭秀
同じへ千ちのき須二の中村　義風
右一順

国れ雪を後の分千移り分　至峰（俱大養父）
経るれ高も乱るゝ朝やきゝ雨　謂庸

鶯の雲もやはらく初音の縁　李栢
住馴し戸も東嫗のしたの学　野牛
[illegible]　春江
[illegible]の杉　（生野）袴仙
水鳥や芦をしき葉の浮御坐　京秀
鶴鷲鵜葉の床を問ひ来るか　蘭秀
妻の戸明て出るかに見えり名の目　義風
徒に祈も川ら無き念佛　兎雪

水鳥の雁干沖のしき木の分　諸香
[illegible]　文民
世に[illegible]　（竹田）西淮
此秋の[illegible]　奠潜
福の青の川瀬千鳥[illegible]　（廣谷）五畔
[illegible]日馴て幸し[illegible]　馬北
[illegible]　鳥秋
[illegible]

けりとしや杉橋のなりかもしと咲　正路
澄れ音れ稀く稔事れ重さ弥　臨風
着りや雪解す星れ冬の月　廿年 虎吉
あとりの浪蹴立り平瀬の南　長平
手伝寄すちるや裏板の流き星　字樵
白鳥をなぜ流れ日見秋れ蘇　乙坡
うぎもく雪時雨のなきの此時雨弥　湯島 可然
しとゝるみれ日菊すちるみれ　長圃

あさの月れ幾朝ゑて秋のく鶴　出石 梅国
水雪や雪とゝ雨又月とゝみ　月波
うゝ枯やくれ所詠も秋の学　鶴夢
しゝ啼や月も入給れ山津美　竹巣
山茶花や日も暮ひれ色重美　左彦
晩稲田す刈れ稔し菓山学　眉紅
きゝ菊れ秋す枯ゝ重る匂れ　梅午
あれ花す雨晴月れ有明の　鳳樹

来のりし此月吹落し雲来ゝ
もそしなき夜に落ゝ秋の日来ゝ　峰旭
掛のうや石燈籠に落あるり　梧堂
裏に松やあやなくふけて雨に音　赤間関　里江
よき人と出しやうらん小松川　里芳
落に雲ゝ春を郎に如あまり咲ゝ　阿声
燈を消して妹を来せり暮に電　常州潮来　籟如
梓弓ひゝ結ゝ菱や白つもき　下野栃木　其樹
朝子　素練

果川に水みちりな里来の雨　加賀　馬来
来の山面ちれ松に沈るか軍　、　兎文
苗代や三日月の輪に啼蛙　明石　霞江
果子雪果に時雨の里なるゝ　伊勢　無曲
新風千霞ゝ出らせて菰菱ぬ　、　甘谷
菱原や小雨降根の九月　筑前　青人
梅千降うめに消ゝ来の雲　能登　玟卜
霜白し面を白婦浪に音　遠江　方壺

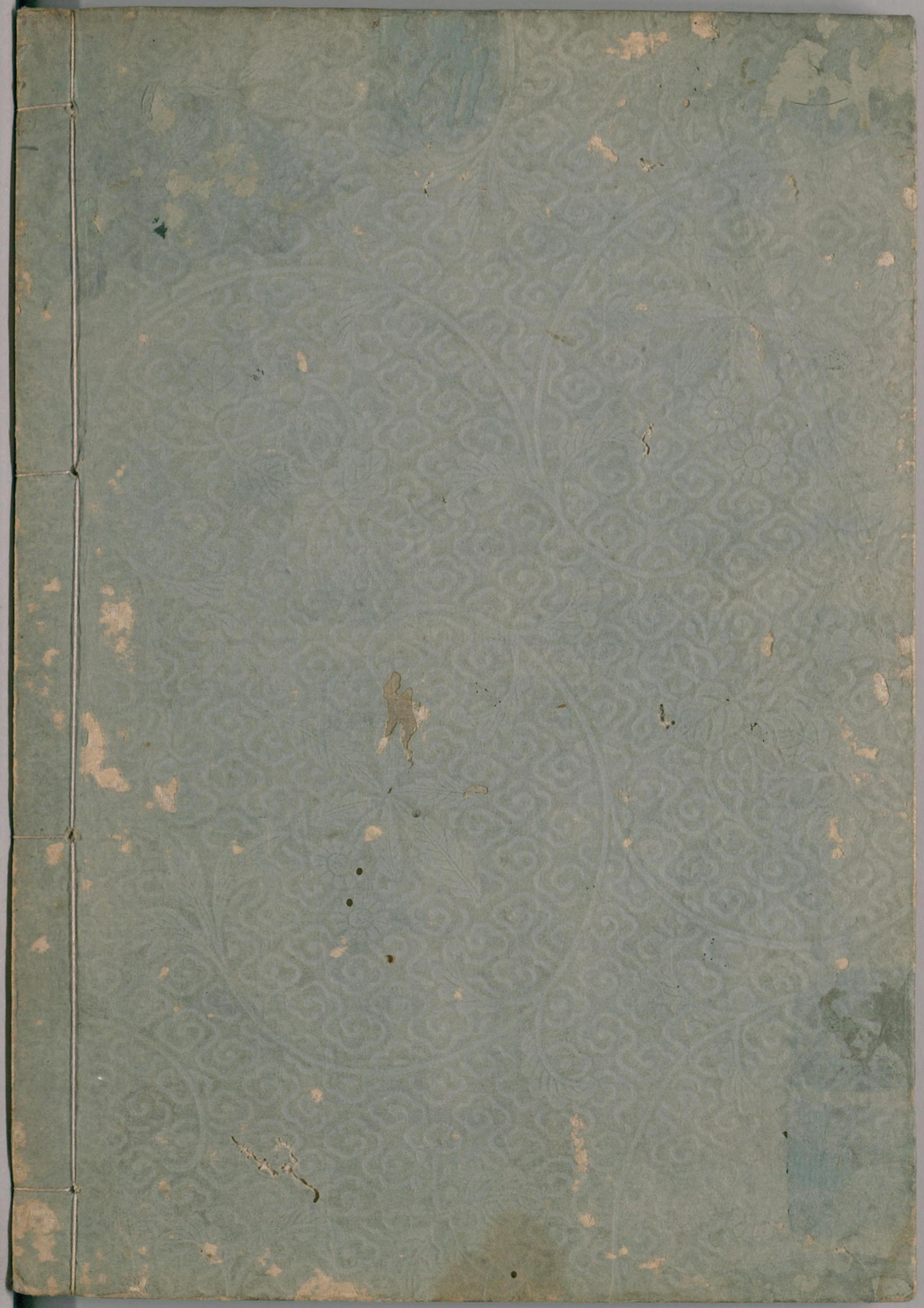
863
73
ヨルリウリ

14140

学笛は上手作ら也 春の風 江州 文花
白瀧 手きれふて 夜は嘆に竜 信州 蘭二
春雨は八日の中 花は彼岸の角 円梶原 洞々
椿 おのてはらく魚の目来哉 佐治 甜秋
明の花人にうし語を見られけり 京 楚六
春は目眼に見る相しを海の浪 武州 羽鳥
学はまつ海山手みとり 芸 玉屑

御俳諧書林 京三條通寺町西 菊舎太兵衛

国立国会図書館 タイトル『道の灯かげ』 請求記号 863-73
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『道の灯かげ』　請求記号 863-73

ガラス使用